多摩デポ通信　第59号

特定非営利活動法人共同保存図書館・多摩

2022年1月28日発行

〒182 - 0011 調布市深大寺北町一 - 三一 - 一八

●HP／https://www.tamadepo.org/

●E-Mail depo_tama@yahoo.co.jp

本年度の事業の進行状況について

理事長　座間直壯

年が明けて一月ほど経ちますが、皆様、新年のお喜びを申し上げます。

昨年に続き新型コロナは収まらず、オミクロン株に変異し感染拡大の勢いを強めています。この様な状況下ですが、「多摩デポ実践講座」第１回を昨年12月にリモートで開催しました。

実践講座は、多摩地区の現役の図書館職員や会計年度任用職員が一堂に会し、理解と連携をはかり、今後の図書館活動に重要な資料保存を視点の中心として、広く情報交換の場として活用されることを願って始めました。今後も継続して開催し、図書館員の広場として活用していただきたいと考えています。ご参加をお待ちしています。

また、図書館連携の一助として当初から取り組んでいる、「図書館資料の里親探し」ですが、昨年暮れに、ある図書館から大量の提供希望が出されました。有難いことです。早速多摩地域の所蔵状況を調査し、未所蔵または欠本・汚破損本補充の可能性がある図書館に打診したところ、多くの図書館から受け入れ希望が寄せられました。提供してくれる図書館にその分を連絡し、希望する図書館へ配送することができました。

ほかには、まもなく図書館長協議会の図書館サービス研究会で、ＴＡＭＡＬＡＳ一括処理システムを使った除籍作業の事例報告の会が開催される予定です。多摩デポでは、この会の内容を踏まえた実践講座を開催する予定です。

コロナ禍でこれまでのような対面での活動ができない状況ではありますが、可能な限りの事業を展開していきたいと思います。

皆様のご健勝を祈りつつ、今年もよろしくお願い申し上げます。

「多摩デポ実践講座」始めました

多摩デポでは、保存資料の利用について学び考え提案する活動を続けてきました。新型コロナウィルス感染への気がかりのため、リアルに同じ会場に集まることが躊躇される日々が続く中、現役世代の毎日の仕事に役立ててもらいたいと、Ｚｏｏｍを利用した実践講座を開くことにしました。

前号で第１回目の開催を

□　今号の内容　□

・本年度の事業の進行状況について　座間直壯
・「多摩デポ実践講座」始めました
・第２回、第３回実践講座の予告
・「図書館資料の里親探し」中間報告
・「覚え違いタイトル集」
・（株）カーリルとの共同研究　定例会報告
・『“市民の図書館”の資料保存問題』（本の紹介）：転載　佐久間美紀子
・『出版ニュースにみる図書館問題』
・会の現勢

予告していましたが、「どうして、あれが検索でヒットしないの？」をテーマに、12月7日に開催。21名の現役図書館員の方に参加していただきました。

このテーマは、日頃使っているＯＰＡＣで、実際には所蔵しているにも関わらず上手くヒットしないことがあるのはどうしてかを探り、所蔵資料は確実に利用者の許に提供できるようにしようとの思いで設定したものです。

事務局から出した事例は、

①『太宰治全集』筑摩書房版で「Ｗｈａｔ ｉｓ ｒｅａｌ ｈａｐｐｉｎｅｓｓ」という文を見たというが、何巻に収載されているか？

②参議院議員だった市川房枝さんが砂川ちよさんについて書いている文を読みたい

③「あくびがでるほどおもしろい話」という子ども向けのお話を探している

の三つでした。

事例はこれらに限らず、皆さんが経験していることを出し合って続けていけるとよいと考えています。

助言者として参加してくださったカーリルの吉本代表からは、

（ａ）統合検索や横断検索は検索項目の範囲が「書名」「著者」「出版社」など狭く設定されている

（ｂ）図書館の検索は、曖昧検索で広い範囲の検索結果を求めるよりもノイズの少ない検索結果を求める傾向が強い

（ｃ）カタカナ、漢字、記号などの混じりあった語での検索はまだまだ改良の可能性がある

（ｄ）一文字だけの書名や特殊な記号を使った検索語での検索は難しい

（ｅ）検索システムによっては、漢字の旧字での検索ができないものもある

などのお話がありました。

因みに、①は、Ｇｏｏｇｌｅ Ｂｏｏｋｓで近いものがヒットする。ひと手間かけてもよいのでは？ ②は、『砂川・私の戦後史』の巻頭に「砂川ちよさんに寄せる」という小文がある。「市川房枝」という著者だけに拘らず、「砂川ちよ」にも目をむけること。③は、都立の統合検索では、所蔵していてもヒットしない館もあることに気をつけたい。

現場で遭遇した様々な事例を出していくことが、図書館の蔵書検索機能の向上に繋がるそうです。現場からの「あれ？」を寄せていただければと思います。

なお、ＯＰＡＣの使い方についての講座は、応募を職員に限らないでも開催する予定です。

第２回、第３回 実践講座の予告

さて、前段の（ａ）～（ｅ）には、「なら、これも」と思いあたる事例が頭に浮かぶ方も多いと思います。

そこで実戦講座の第２回は、「検索システムと噛み合わなかった事例」の第二弾を開催するプランを考えています。第１回では、募集を現役の図書館員に限らせてもらいましたが、その枠は取り払いますので、市民の方も職員でない方も是非ご参加ください。

「こんな場合は、どう検索したら良いの？」「所蔵していて当然と思えるような図書を検索したら、検索結果が０件になってしまって・・・」という疑問も、遠慮なくお寄せください。書庫の奥で呼び出されるのを待っている資料に出会えるかもしれません。日程は決ま

り次第、お知らせします。

そして第３回は、前号で紹介した「ＴＡＭＡＬＡＳを活用した大規模図書館での除籍作業」について、担当された府中市中央図書館笹川美季氏を交えた講座を開催する計画です。

この第３回「除籍作業」のプランについて少し説明しましょう。

東京都市町村立図書館長協議会に設置されていた除籍資料実務担当者会が、この度、同じく館長協議会内の図書館サービス研究会（事務局は、今年４月まで日野市立図書館）の取り組みとして位置づけられました。同研究会の取り組みの一環として、２月４日には笹川氏の報告と、ＴＡＭＡＬＡＳ（多摩地域公共図書館蔵書確認システム）の構築に携わられたカーリル代表の吉本氏のお話を交えた内容でＺｏｏｍを使った研修会が開催されます。この研修会は、録画して多摩地域の市町村立図書館職員全体に視聴できるようにするようです。

この研修会の実施後、ＴＡＭＡＬＡＳを提供する当会としては、研修会で出された意見や反響を加え、さらに除籍作業の問題を掘り下げたＺｏｏｍによる講座を第３回講座として開催しようというプランを考えています。

ＴＡＭＡＬＡＳを府中市のような蔵書百五十万冊規模の大図書館で除籍の検討を進めるのに、具体的にどのように使ってもらえたのか、使えるのか、一括蔵書確認に要した時間や作業の全体像を教えてもらうことは大変興味深いことです。ＴＡＭＡＬＡＳ活用のために府中市がされた工夫、具体的にどう使い、使い勝手はどうだったか、見えてきた課題、研修会で他館の方とどんな議論をしたかなどを踏まえ、ＴＡＭＡＬＡＳ一括処理システムをもっと現場で活用するヒントを一緒に考えられたらいいと思います。

館長会の除籍資料実務担当者会では、多摩地域の図書館の「除籍のためのガイドライン」作りを構想してこられましたが、私達の「実践講座」での掘り下げが、参加する職員の方々の意見交換によって、担当者会の検討にフィードバックできればいいと考えています。

この二つの講座は、いずれも年度内に実施する方向で調整中。開催日や申込方法など詳細が決まり次第、ご案内します。年度末の慌ただしい時期ですが、どうぞご参加ください。

（事務局　雨谷・中川）

「図書館資料の里親探し」の中間報告

１　里親本提供の申し出と所蔵調査・活用募集

師走に入っても、ウンともスンとも言わない事務所のＦＡＸ。今年度の「図書館資料の里親探し」は申込み無しで終わるのかな、と淋しい思いでいたところでした。やたらに分厚い封筒が郵便受けに届きました。中身は、調布市立図書館からの、大量の申込用紙による依頼！

急いで各自治体の所蔵状況調査をしたけれど、内容は不揃いの全集が大半。端本の欠本調査は時間がかかります。３９タイトル、計４０４冊という量も半端ではなく、なかなか手ごわい。ともあれ１２月１６日に里親募集を開始しました。役所

が御用納めの12月28日が締切日です。

慌ただしい時期にも関わらず、有り難いことに9自治体から計114冊に対しての応募をいただくことができました。新館建設を準備中の自治体からは一括引取を含めた応募、他の自治体からは概ね欠本補充の応募です。

今回も「①一括引取希望 ②欠本補充 ③汚破損本取替えの順で、各先着順」というルールにより、最終的に7自治体が、20タイトル計95冊の里親となると決定。御用始めには間に合うように結果通知を送付し、依頼してくれた調布にも結果をお知らせして、譲渡準備を整えてもらいました。

2 里親本の引取りと配達

1月21日。折しも、「まん延防止等重点措置」適用初日になってしまいましたが、今年度最初の里親館への資料配送を行いました。

朝9時30分、運転をしてくれる座間理事長と雨谷、田中の3人で調布市立中央図書館に集合。里親館別に仕分けていただいた資料を車に積み込み、いざ出発。

まずは、府中市立中央図書館へ。里親になっていただいた資料は14冊。

次は小金井市立図書館へ6冊。蔵書点検で休館中でしたが、担当者の方が受け取りに出てくださって終了。

ここまでは比較的道路も空いていたのですが、立川に向かう道路は渋滞気味。なんとか抜けて、立川市中央図書館に15冊お届け。

ここで昼食休憩。

午後の最初はアキシマエンシス内に移転新設の昭島市民図書館です。昭島駅か中神駅から線路沿いに歩けば、すぐ目に入る場所なのですが、高層のつつじが丘ハイツが林立する中に入ったら、迷ってしまいました。やっとの思いで「国際交流教養文化棟」に到着。一階と二階が図書館です。ゆっくり見学したいところでしたが、4冊を手渡して早々に出発。八王子立中央図書館に向かいました。ここでは、カウンターの担当者が多摩デポのことをご存知なかったようで、4冊を手渡すまでに若干時間がかかりました。

最後は大口の多摩市立中央図書館です。来年5月に新中央図書館開館予定で工事が進む多摩市では、新刊だけでなく、古い全集などの収集・欠号補充にも目を配り、全冊引き取り希望のタイトルもあったため、冊数も49冊と多くなりました。

ここで3時30分、本日の配達は終了です。

引き取り申し込みのあった中で、武蔵野市は宅配便の利用が可能ということで、別途、着払いでのお渡しとなりました。

コロナ禍ということもあり各館の滞在時間はできるだけ短く済ませざるを得ないのが残念でしたが、どこの館でも欠本を埋めることができてよかったと、とても喜んでくださいました。

廃棄するにはしのびないと依頼してくれた調布市立図書館にも喜んでいただき、両者をつなぐ多摩デポの役割を実感した一日でした。

【里親を募集した本】

「赤い鳥復刻版 Aセット」
「名著復刻 日本児童文学館 第1集」
「芥川龍之介全集」
「いいなづけ」
「内田百閒全集」
「往復書簡」
「大宅壮一全集」
「岡本かの子全集」

「小川国夫作品集」
「梶井基次郎全集」
「亀井勝一郎全集」
「河上肇全集」
「川端康成全集」
「菊池寛文學全集」
「現代日本文学館」
「真山青果全集」
「特撰　名著復刻全集
　近代文学館」
「志賀直哉全集」
「日本の文学」
「神曲　新版」
「戦後文学論争」
「漱石全集」
「漱石文学全集」
「チボー家の人々」
「定本小川未明童話全集」
「定本北條民雄全集」
「定本横光利一全集」
「徳川家康」
「野上彌生子全集」第Ⅱ期
「日本の博物館」
「日本プロレタリア文学
　集」
「日本文学全集」
「ヴァレリー全集」
「葉山嘉樹全集」
「二葉亭四迷全集」
「文庫へのみち」
「宮本百合子全集」
「武者小路実篤全集」
「名著復刻　日本児童文学
　館　第2集」

なお、1月6日には調布からさらに追加で、5タイトル計85冊の依頼がありました。現在今年度2回目の里親募集を開始し、ご応募を待っているところです。さらに、1月26日には府中市からも依頼をいただき、里親探し事業は予想をくつがえす盛況となっています。

（事務局　吉田・雨谷・田中）

「覚え違いタイトル集」

少し余白があるので、図書館のＨＰにある面白情報を紹介します。愉快で、検索の改善を考えるヒントにも使えそうです。

図書館では、利用者から「どんな相談があり、どう対応したか」「こんな質問にはこう調べたらいい」を後の仕事に生かすため、記録して職員で共有していることがあります（以前はカウンターの引き出しにはノートが置いてあったものだとも聞きます）。

福井県立図書館のＨＰに、「覚え違いタイトル集」という入口があります。開けると、間違った書名と正しい書名の対応リストが出てきます。1月26日現在、９７９件が載っていて、今なお増加中。

「この本はどこにありますか？」と利用者に聞かれ、書名が何か微妙に変で、職員が頭をひねりながら、利用者と一緒に書架に出ていき「それはこれのことではないですか？」と本を手渡したような、書名の覚え違いの集積です。だから一つ一つの後ろには、「うろ覚え」していた利用者の「これかー、よかった！」の満足の顔も浮かぶような、ほほえましいリスト。

それにしても『ぶるる』って、『カラスのどろぼうやさん』って、『ハーメルンの音楽隊』ってなんだ？『そのへんのいし』って、カフカの『へんたい』ってなんなんだ？

なおこの実践から『１００万回死んだねこ―覚え違いタイトル集』福井県立図書館・編著　講談社　21年11月発行、という本が生まれています。

（答えはＨＰで）

（株）カーリルとの共同研究 定例会報告

この間、「たましん地域文化財団歴史資料室」（以下、「歴史資料室」という）の資料データに対してカーリルのシステムを使ってＩＳＢＮの機械的附番（自動附番）を行い、その結果が正しく附番されているかを検証してきました。

歴史資料室が所蔵する約２万５千冊の図書資料のうち、（株）カーリルが機械的に自動付番した約１千件のデータが対象となりました。大部分の資料に対して正しくＩＳＢＮが附番されましたが、誤附番となった資料が５５冊ありました。この５５冊について、現物を確かめながら誤附番になった理由を探っています。

その結果、誤附番になった理由としては次のことが考えられます。

①「書誌違い」……書名、著者名、出版者等の書誌情報の中に同一の文言が含まれていて誤附番になった場合（２３件）

②「版・刷り年違い」……歴史資料室の資料にはＩＳＢＮが附番されていないが、その後新たな版や刷りが発行され、その時にＩＳＢＮが付与されていて、それによって附番となった場合（２２件）

③「シリーズで同じＩＳＢＮ」……当初からシリーズに一つのＩＳＢＮが附番されている場合（２件）

④「その他」……個々に検証が必要な場合（８件）

「その他」については、当該書誌になぜそのＩＳＢＮが附番されたのかをまだ検証中です。

また、「書誌違い」「版・刷り年違い」だった分については、今後は機械的附番をする時に、資料の発行年を意識させ、違う場合は同定しないとか、（確定しないで）候補リストを出力させるようにすることで対応できないかなどをさらに検討しています。

前回も書きましたが、今回の検証は、ＩＳＢＮの自動付与の精度を検証し、実用的に使えるようにできないかということが目的でした。多摩地域の図書館の資料データには、本当はＩＳＢＮが付いている出版物でありながらＩＳＢＮがデータ入力されていないものがあります。そのような資料に正確なＩＳＢＮを自動付与できるようになれば、ＴＡＭＡＬＡＳに対応できる資料群を増やすことができます。今回の自動附番と検証作業については、報告書にまとめて発表する予定でいます。

（齊藤）

本の紹介記事の転載

『みんなの図書館』２０２１年１２月号ｐ５８～ほん・本・ｂｏｏｋ（本の紹介欄）掲載

『“市民の図書館”の資料保存問題』山口源治郎（著）

佐久間美紀子

本書は第３９回多摩デポ講座の記録であり、多摩デポブックレットシリーズのＮｏ.１５である。Ｎｏ.１の発行が２００９年だから１３年で１５冊ということになる。地域のＮＰＯという形でこれだけ高水準の、しかも資料保存に特化した活動を続けてきたその持続力には頭が下がる。

思い返せば筆者が図書館で仕事を始めた１９７０年

代初頭、地方小都市から見る多摩地区はまぶしいほどの図書館先進地域だった。やがて経済成長もバブルも終わり、失われた30年が過ぎていった。その間、新しい図書館も新しい図書館サービスも日本各地に次々に生み出されていった。だがそうした中でも多摩地区は、図書館を守り育てる市民の力という面でいぜんとして先進地域であり続けている。

さて、山口氏の講演は概略以下の通りである。

「中小レポート」にも『市民の図書館』にも、保存という発想はほとんどなかった、というよりむしろ保存中心主義に対する強烈な批判があった。資料保存より資料提供にエネルギーを割くべきであり、積極的に除籍や廃棄を行って書架を新鮮に保つべきであり、そのためには資料費の確保が大事である、と主張されていた。特に『市民の図書館』は、今何を優先すべきか、という明確な戦略的な発想で書かれており、資料保存は都道府県立図書館が担えばよい、という位置づけであった。

その後の「望ましい基準」には、都道府県立図書館による市町村立図書館支援策としての資料保存、ということが出てきたし、初期の「任務と目標」には都道府県立図書館は保存センター的機能を持つべき、という文言があった。しかしこうした提言に沿った実践例は滋賀県など少数にとどまって、全国的には定着しなかった。

東京都下では、『市民の図書館』に沿った図書館づくりが進められてきた。したがって保存は都立図書館でという方針だったし、関係が良好なうちはそれでうまくいっていた。その協力関係を一方的に廃棄してきたのは「都立の背信」というべきだが、一方には書庫の収容能力の限界という問題があったことも確かだろう。同じころ、多摩地区の市町村立図書館の書庫の9割がすでに埋まっていた。後は除籍によってしのぐほかはない。

今必要なのは「中小レポート」『市民の図書館』が示した枠組みからの脱却である。特に、資料提供を裏付けるのは保存、という点を明確にしなければならない。また都道府県立図書館に任せるだけでなく市町村立図書館自身の保存責任も考えていくべきだろう。

『市民の図書館』は積極的廃棄論だけだったが、その図書館で所蔵すべきものは何か、という積極的蔵書構築論（所蔵についてのミッション）が何より必要だ。新鮮さだけでない奥行きある蔵書コレクションをいかに作れるか、それが書庫に保存されている資料の役割であろう。

この間、多摩デポは資料保存を議論する広場の役割を果たし、保存のためのシステム構想、ＴＡＭＡＬＡＳの構築などの現実的な提言を行い、市民ベースで資料保存のあり方を訴える活動をしてきた。今後は自治体やＮＰＯ、友の会などの連合による“共同保存の主体づくり”が必要になってくる。

最近は巨大災害による図書館の被災で、別の面からも資料保存問題が浮かび上がった。資料保存に対する都道府県立図書館の役割も協議が必要だ。資料保存は市町村立図書館を支えるが、実はそのことで都道府県立図書館の存在意義も支える

ことになる。それに気づかなければならない。

講演のあと会場からの質疑では、ＯＰＡＣの導入で利用が変化し、書庫資料の利用が増えたことが指摘された。確かにネットで蔵書検索していれば、開架か閉架かの区別などない。新しい技術が新しい需要を掘り起こしたわけだ。いわゆるロングテール現象はビッグデータによる可視化で図書館以外でも発見されている。

また、１９７０年代に多くの図書館が建てられたが、そろそろ50年たって耐用年数が切れかかっていることも取り上げられた。建て替えの時期が公共施設の再編がすすめられる時期に重なってしまった、多くは廃館とか複合化とかに直面するだろう……と。

『市民の図書館』から半世紀たった日本の図書館は、当時からは予想できなかった時代に入っている。この二つはそれを示す格好の事例といえるだろう。『市民の図書館』は、今何を優先すべきかという明確な戦略的発想で書かれているという。であれば２０２０年代の“この今”、図書館は何を優先させるべきなのか。どのような新しい戦略がありうるのか。

多摩デポの会はその最前線で考え続けているのだと思う。

（さくま・みきこ／静岡）

（注）正式名称
中小レポート
『中小都市における公共図書館の運営』
望ましい基準
『公立図書館の設置及び運営上の望ましい基準』
任務と目標
『公立図書館の任務と目標』

郵便振込で会費を入金していただく際、現金では、料金受取人払いでも追加料金がかかるように変わりました！

料金受取人負担の払込取扱票（赤字印刷されている用紙）の場合でも、払込料金は受取人（多摩デポ）の負担ですが、**現金での支払いでは、さらに払込人に追加料金が１１０円かかるようになりました。**１月17日からの変更です。

この用紙で通帳またはキャッシュカードで**口座からの支払いの場合**は、追加料金はかかりません。

相次ぐ値上げには困ってしまいますが、会員の皆様、できれば負担の少ない振込み方法を選んでください。

▼『出版ニュースにみる図書館問題』（松岡要・編）という、同誌に松岡氏が執筆した巻頭論文23本を集めた自費出版が出ました。松岡氏はブックレット第10号著者。Ａ４で１８０ページもあります。頒布価格７００円。発行者は石原照盛。連絡先は０２７６－８８－３０８０。

★会の現勢
２２年１月２５日現在
●正会員
（個人会員81名）
（団体会員２団体）
●賛助会員
（個人35名）
（団体１団体）
●年会費
正会員　五千円
賛助会員一口二千円

※今年度の会費納入がまだの方は、早めにお振込みくださるようお願いいたします。